

第9回

TTMフォーラム九州

日時

2018年10月20日(土) 13:30~17:30

特別講演

『攻める凝固検査学であり続けるために』

演者

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科
血管代謝病態解析学分野

橋口 照人 先生

教育講演

『血栓形成と血栓溶解の把握』

演者

神戸学院大学 栄養学部
臨床検査学部門

山下 勉 先生

会場

ホテルレオパレス博多 (3Fイベントホール)

〒812-0013 福岡市博多区博多駅東2丁目5-33
TEL:092-482-1212



(JR博多駅 筑紫口より徒歩3分)



共催: TTMフォーラム九州
株式会社LSIメディエンス

講演要旨

特別
講演

攻める凝固検査学であり続けるために

トロンビンの作用は実に多彩である。第V・VIII因子の活性化、フィブリンモノマーの生成、トランスグルタミナーゼである第XIII因子の活性化そして血小板を活性化して凝固・止血反応は完成に向かう。一方、トロンビンは止血反応の場から離れると血管内皮細胞上のトロンボモデュリンと結合して活性化第V因子と第VIII因子を不活化するとともに、トロンビンに刺激された正常血管内皮細胞はt-PAを発現して凝固反応の拡大は制御される（線溶系による逆制御）。これらの反応系はズリ応力と壁圧のかかる内皮細胞の剥がれた血管の修復に貢献する。止血・凝固系もまたホメオスターシスを保つ生体システムとして恒常的に作動して血管を守っている。

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 血管代謝病態解析学分野

橋口 照人

教育
講演

血栓形成と血栓溶解の把握

血液循環における恒常性維持には種々のメカニズムが関わっています。地球を1周半もする血管に血液を常に循環させるという途方もないシステムです。この血液循環に何らかの障害がある場合、それは、凝固時間の延長という形で臨床に応用してきました。しかし、近年、生活習慣病をはじめとする易血栓性を呈する疾患に対しては、従来の出血を対象とした検査法は適当ではありません。そこで分子マーカーと呼ばれる血小板・凝固・線溶反応の中間代謝産物を測定することにより易血栓状態を把握することが行われています。

しかしながら、例えば抗リン脂質抗体症候群のように、凝固系検査で出血傾向が疑われるにも関わらず、臨床的には易血栓性を呈する疾患があります。これは、血液を対象とした測定の情報のみから血液循環の動的平衡状態を把握することの難しさを示唆する一つのエビデンスです。そこで、今回は、研究レベルではありますが、血栓形成や、血栓溶解を把握する試みとして我々の取り組みをご紹介します。

神戸学院大学 栄養学部 臨床検査学部門

山下 勉

共催： TTMフォーラム九州
株式会社LSIメディエンス